

福田市朗先生の経営学部への思い

摂南大学経営学部教授・図書館長の福田市朗先生は2018年3月にご退職の予定である。

福田先生が経営情報学部(現:経営学部)助教授として摂南大学に着任されたのは、1989年4月のことである。経営情報学部の設置は1982年であったから、まだまだ創成といえる時期から今日に至る経営学部の歩みとともに先生は本学部で過ごされた。その間、真摯な研究活動、熱意あふれる教育・学生指導の傍ら、学部にあっては、経営環境情報学科長また経営情報学科長を計6年間に渡って歴任され、またそのお仕事振りも目に留まったのであろう、全学的には地域連携センター長を務められ、現在は、図書館長の要職にある。謙虚に淡々とまた着実に、先生は、経営学部をまた摂南大学を支えてこられた。

福田先生のご専門は心理学である。摂南大学にご着任以降の先生の研究教育活動の一端は、先生自らの「経営学部と心理学」を参照頂くとして、経営学部が、当時西日本で初めての「経営情報学部」として設置されたこと、工学部(現:理工学部)に遅れること7年、国際言語文化学部(現:外国語学部)と同時に新設された摂南大学における最初の社会科学系学部であったことなどから、経済学、社会学と並んで心理学も、経営学および情報学関連の諸分野とともに経営学部に配置されることになったものとお聞きしている。

私の経験で恐縮である。「三つ子の魂百まで」という。特に社会科学系学部における学部教育は、学生目線でいえば、所属の学部・学科の専門分野について「何かほんやりと分かったような---」といった気持ちにさせるものであると思っている。ただし、学部教育を軽んじてはいけなない。各専門分野それぞれの個別具体的な知識・学修はさておき、4年間を通じて学生は、それぞれの学部・学科が持つ固有のものの見方・考え方また課題に対する切り口を知らず知らずのうちに確かに身につけることになるのである。学生の専門基盤を形成するのは学部教育である。大学院で、当該分野の研究を継続すれば、各専門分野に特有の組織風土までもが意識せず身についていく。そんな風に理解している。

経営学部における心理学専攻の研究者というのが、先生のお立場である。研究者としてはブレることなく自身の関心に従って心理学に取り組んで行きたい、しかし他方、教育者としては、ご自身の研究成果をそのまま講義にフィードバックするというよりは、経営学部に沿った形での講義がより望ましいのではないかと、摂南大学29年間の先生のご奮闘を私なりに拝察すれば、このような模様になる。学生を心より愛し、教育にも多大なエネルギーを惜しまれない先生にとって、学生からの反応も気にかかる。先生の公開授業を参観させて頂いた折、ゲーム理論を用いたかなり高度な内容に学生が生き生きと取り組む授業風景に感心した私が、先生にその旨をお伝えしたところ、「学生の反応が、今一つでなあ---」としみじみ話された。翌日、廊下を歩いていると、演習室からゼミ生を叱咤激励する先生の大きなお声が漏れ聞こえ、思わず微笑んでしまった。経営学部を支え続けて下さっている先生だと、その時、改めて確信した。

経営学部長 高尾 裕二

